

## プラ問題から廃棄物イノベーションへ

### ◆ プラごみ輸入制限から世界的なごみ問題深刻化が懸念される

中国がプラスチック廃棄物の輸入制限を講じ、一年が経過した。中国企業が日本に進出し、再生可能なPET原料に変え中国に輸出する動きもあるが、フィリピンに不法輸出された韓国発のゴミが戻されたと19年1月に報じられるなど、廃棄物問題への関心が高まっている。

18年9月公表の世界銀行「What a Waste 2.0」では世界の廃棄物発生量は16年から50年に70%増えると予測する。量的には食品廃棄物が多数を占める一方、世界的なeコマースの拡大に伴い、プラスチックや段ボールを含む包装廃棄物量が増加している。UNEPの調査報告で人口一人あたりのプラスチック容器包装廃棄量が世界で2番目に多い日本は、このままでは風当たりは強くなる。また、やむを得ずに増える廃プラスチックの焼却処理による温室効果ガス増加の課題も無視できない。世界でごみ問題に対する懸念が高まるなか、廃棄物削減、再利用、リサイクル効率化など「循環型経済」に繋がるビジネスの拡大が求められている。

### ◆ 世界的なプラスチックを含むごみ問題は廃棄物イノベーションを促す

北米ではgoogleの親会社Alphabetが新たな廃棄物処理システムを開発、例えばトロント市でロボットによる都市ゴミ処理システム導入を進めている。シリコンバレーのScrapoは、ごみ処理業者と廃棄物リサイクルを望む企業とのマッチングを世界で進める。米東部TerraCycleは、「捨てるという概念を捨てる」という姿勢により、従来リサイクルが難しいとされた多くの食品系包装材などのリサイクルに挑戦している。米Ecovativeはキノコ菌糸体から包装容器をつくり世界に展開する。北米ではユニークな取り組みを進める事業者が多い。

また、欧州では包装容器やプラスチックに関し、製造業とリサイクル事業者の共同開発が進みつつある。イネオスのポリスチレンのリサイクル開発、BASFとユーザ間での再生プラスチックの開発事業など、リサイクル開発を着実に進める。

自国で出したゴミは自国で処理すべきという流れが強まる中、日本でも国内の再生プラスチック市場の育成を含む、イノベーションが必要である。 【新井喜博】